

反省会

2025. 10. 6

現代は、知識社会である。知識社会においては、単なる知識ではなく、知恵を身につけなければならない。知恵とは、何よりも経験を通じて学ばべきものである。

では、どうすれば経験から知恵を学べるのか。反省という方法がある。学校は、反省が好きである。子どもも先生も1年を通して、よく反省している。反省には、深く考える力が求められる。反省とは、いかなる方法なのか。

一つの経験をしたとする。その経験を徹底的に追体験し、そこで学んだことを極限まで言語化する。そうすることで、知識が知恵へと深まっていく。経験が体験へと高まる。特に、最も大切なのは、言語化である。

言語化には方法がある。反省会というものがある。例えば、大会の最後に、選手たちに質問をする。「今日の試合は、自分たちの納得のいくものだっただろうか」「今日の試合で、自分たちは強くなることができただろうか」

こうした質問を受けた選手たちは、その瞬間から、今日の試合を頭の中で追体験し始める。そして、そこで感じ取ったこと、つかみ取ったことを、一生懸命に言葉にして語ろうとする。「今日の試合では、集中力が足りませんでした」「勝ちたいという目標をもっと強くもつべきでした」

指導者は、鋭い視点から様々な質問を投げかけることによって、選手たちが経験を体験にまで高め、そこから言葉にならない知恵をつかむことを支援していく。これが、反省会である。ここでの鋭い視点というのは、次の大会で勝つことに結び付くような要所を鋭く突いたものである。言葉を換えれば、着眼点といってもよいかもしれない。指導者は、選手たちとのやりとりを通して、試合に勝つための視点や着眼点をも教えている。

自分が部活動の顧問のときには、上記のような反省会をやってはいない。こちらから一方的に話すことが多かった。練習終了時間が決まっているということもあったが、大会のとき、あるいは雨が降りテニスコートが使えず、ミーティングなどを行ったときなどには、やるべきだったと思う。今になって考えればそう思う。そうすれば、もう少し違った展開になったかもしれない。

よく反省という言葉を使うが、単に軽く振り返るという意味で使っていることが多いように感じる。あまりにも簡単に使うため、反省という言葉の意味が軽くなっているのではあるまいか。本来は、大切な深い意味のある言葉である。今一度、反省というものを見つめ直したい。